

# 京交山岳部報

No 371

83 9月号

〔第1448回例会〕 ケービング入門

## 質志の鍾乳洞 (T)

日時 9月4日(日) 8時 西京極体育館前集合  
コース 京都一周知-瑞穂町-三ノ宮-質志  
担当者 本局 鷺見敏一(TEL 3418)  
備考 岩のぼり用具(カラビナ、シュリング、ヘルメット、セルフスト、ヘッドランプ等)持参の事。

〔第1449回例会〕 「揖斐、坂内の山をいく」

## シリーズ 第一回 猫ヶ洞(点名 三ツ又)

日時 9月11日(日) 出発 9月10日(土) 午後出発、  
コース 神又谷出合P、幕営…9月11日 P. 発、神又谷を三ツ又出合へ溯行…  
△1065.4mの北東尾根を猫ヶ洞に登頂…△より「仏法平(ぶっぽうがたわ)・1029m」に縦走…古道(川上~土倉)をたどり(訪ね)神又谷に  
下り、Pにもどる。 地形図 美濃川上、2万5千  
担当者 伊藤潤治(TEL 463-4936)

〔第1450回例会〕 蘆山を楽しく

## 天狗山 △1148.2m (T)

日時 9月17日(土) 早朝出発予定  
コース 京都-関ヶ原-垂井-横山ダム-広瀬…カマクラ△798.8m…天狗山  
担当者 九条 田中忠久(TEL 2351) 申込み〆切 15日  
備考 マイカーで行きますので希望者は必ず連絡して下さい。

### 今月の集會

(机上講習) 幕営生活一 (鷺見担当)

9月 9日(金) 下鴨寮

〔第1451回例会〕 仲秋の名月

## 大文字山

(R)

日 時 9月21日(水) 錦林車庫 19時集合  
コ ー ス 錦林車庫…鹿ヶ谷…大文字山  
担 当 者 烏丸 大倉寛治郎 (TEL 2346)  
備 考 今年はお月見登山を近くの大文字山で楽しくやりたいと思います。  
雨天の場合は、集合場所で協議して、別の場所へ行きます。

〔第1452回例会〕 美濃の秀峰

## 高賀山

(T)

日 時 9月25日(日) 前夜発、九条車庫 21時出発  
コ ー ス 京都東一岐阜羽島一関市一美濃市一市場一高賀…高賀山△1224m  
担 当 者 本局 大槻雅弘 (TEL 2266)  
備 考 マイカーで行きますので担当者まで連絡の事。

## 例会予告

### 宮後前部長追悼登山 「徳本峠より上高地」

日 時 10月9日(日)～10月10日(月・祝) 8日夜発  
コ ー ス 京都一松本一島々一徳本峠(泊)一明神一上高地一(島々)一奈川渡  
境峠一木曾福島一中津川一京都 (往復コースについては都合により  
変更あり)  
募 集 人 員 25名 (マイクロバス利用) \*参加希望者多数予想に付早急に  
申込み希う。  
担 当 者 岡田(3282) 吉田、大倉  
申 込 切 9月集会 費用 約 13,000円  
備 考 宮後前部長がぜひ例会に組みたいとの希望のまま実現できなかった「  
徳本峠越え。今回追悼の意味で一周忌により実施します。島々より徳  
本峠まで約7時間の行程を錦秋の1日、前部長を偲びながら歩きたい  
と思います。なお 小屋が満員になるのでテント泊りを予定していま  
す。

## 企画運営リーダー会

9月20日(火) 広瀬光宅



魔の山、

## ナンガバルバット

岡田茂久

7月14日の夜、テレビのニュースが福岡登高会のナンガバルバットでの遭難を伝えた。同隊は5月に日本を出発し6月下旬に頂上アタック、そして7月下旬には帰国の予定であったという。遭難の詳細な状況は不明であるが、医師を含む隊員4名と近くにいたオーストリア隊が雪崩に巻き込まれ、1人が死亡、2名が行方不明であると伝えていた。

「ナンガバルバット、パキスタンの首都イスラマバードの北東230km、インダス河源流カシミールのパンチャブヒマラヤに聳える8152m世界第9位の高峰である。その南壁の高さ5000mの岩壁は世界最大といわれ、登頂ルートは南のルパール氷河、北東のラキオト氷河、西のデアミール氷河にBCを設け、各々の尾根に取付くのが考えられている。

1953年、ヘルマンブールの初登頂によりその神秘の頂きのペールは取り除かれ、ついでチェコオーストリア隊の他ドイツ隊による南壁初登攀、超人メスナー(\*)による無酸素単独登頂の偉業など、ナンガバルバットは決して未踏の山ではない。\*(「メスナー、ナンガバルバットには2回も登頂し、58年5月のチュオニューの登頂で世界の8000m級の山10座を教え、あとローツェ・マカルー、アンナブルナ、ダウラギリを登頂すれば、世界の独立峰で8000級14座すべて登頂することになり、それも時間の問題といわれている超人である。)

しかしその栄光の影に、1895年イギリスのママリーが6000mに達しながら2人のポーターと共に行方不明になって以来、1934年ドイツ隊が7480mの前進キャンプで隊長以下9名が暴風雪で、さらに1937年にその雪辱を期すべく再度挑んだドイツ隊はC4で隊長以下16人全員が雪崩に襲われ死亡するなど、ヘルマンブールの異状な行動による初登頂までに30数名、その後の遭難を数えると40数名を上まわる賛を山はアルビニスト達に要求してきたのである。「魔の山」、「人喰い山」といわれる所以である。

1956年頃有恒隊長の日本山岳会隊が8156m世界第7位の高峰マナスルに登頂して以来、昨年プロガイド加藤保男が厳冬期のエベレスト登頂を果しながら残念にも下山途中で消息を断つまで、ヒマラヤの8000mには次々と日本隊の足跡が記録されてきたが、ローツェ(8511m)、チューチューオニュー(8153m)とこのナンガバルバットだけは日本登山隊にその頂きを触れさせることを固く拒んできたのである。もっとも種々の理由があり取組み易い他の山が選ばれてきたわけであるが、本年になりようやく日本隊もこのナンガバルバットを本格的に目標にしてきたのである。

まず58年4月に東京の登歩溪流会、6月に福岡登高会、ついで富山県山岳連盟隊、川崎市教員登山隊の4隊が挑み、来年は日本ヒマラヤ協会、厳冬期には山学同志会が諸外国の登山隊と相前後してデッドヒートを演じることになっているのである。

しかしこの入魂山・ナンガバルバットは、この日本隊に対して、大きく魔の口を開けて待ち受けていたのである。まず先陣をきった登歩溪流会も悲劇の結末を迎えた。ルバール氷河南西稜より取り付いたパーティのうちの8人がC4で荷上げ中に雪崩に巻き込まれ、ほとんどの隊員は奇跡的に脱出できたが、重傷3名又1名は20kmも流されて行方不明、必死の捜索にも発見できず同隊は無念のうちに下山の途をとった。そして今度は福岡登高会にもナンガバルバットは犠牲者を要求したのである。

なぜこのようにナンガバルバットでは遭難が多いのであろうか、ヒマラヤ等の高山に登頂する際には高所における酸素の少なさから肉体的に又精神的に異状な状態になる。これは精神力でもってなんとかできるというものでなく、精神力そのものをも影響下におくものである。これに対処するためには、アラスカのマッキンリー登山で一部実験された減圧タンクを利用する等の方法は考えられるにせよ、一般的には高所順応により体を徐々に低酸素に馴らす以外に方法はない。

ところがナンガバルバットは他の山に比べ山へのアプローチが非常に短かくてすむ。通常何日ものキャラバンでBC設営地点に到達するが、バス・ジープを乗継ぐと2日間でBCに着くという。登山隊員はキャラバン途中で徐々に体を高所順応、前進キャンプ設営で仕上げとなるがBCより頂上まで約5000m弱の高度差でその時間がないのである。

もう一つカシミールヒマラヤ特有の地域的、地形的な天候の特異性である。インド洋からもたらす多量の湿気を含んだ風はバンチャブヒマラヤに猛烈な暴風雪と多量の積雪をもたらす悪天候とそれに伴う雪崩である。過去の遭難例はほとんどがこれによるものである。

登歩溪流会の隊長も出発前に「その辺は充分検討済。ドカ雪には全員が馴れており、前進キャンプをいくつか設定した後、BCにて休養し高度順応を完璧にした上で頂上を一気にアタックしたい」と語っていたと聞く、もちろん他の隊においてもこの様な条件は充分検討しそれに対応する準備は充分してきたものと思うが…。

折から7月22日には京都府高校登山部顧問団カラコルム登山隊が、バツラ山群の未踏峰PK 6885に挑むため出発、同峰南面のククアール氷河上4500mにBCを設営、8月中旬には登頂の予定と聞く。隊長は平安高校の塚本先生、登攀隊長は京商の広藤先生等、普段親しくお付き合いしている高校の先生方15名のパーティである。万全の体制と準備はされておられると推察するが、「まずは無事な登山を心掛けたい」という塚本隊長のことばどおり、無事な登頂と学術調査の成功を祈るものである。

#### 16369 山声雪語「玉子焼談議」の内容一部訂正

平安時代の玉子料理らしきものとして「零余子焼」としてあげましたが、「零余子」とは玉子は玉子でも鳥の玉子とは似ても似つかぬムカゴ(山イモの葉の根元にできる玉子形の芽、山イモの玉子)のことでした。資料の整理を誤り不明を詫言います。

## 第1438回例会

湖南アルプス

# 太神山・矢筈岳・笹間岳

## 縦走にお供して

A N G U

7月3日の例会をサボって皆んなにボロクソに云われたので今日はどんなことがあっても参加しなければと思うと朝4時半に目が覚めた。

7月10日、昨夜の天気予報の通り快晴である。バスに乗ると次の停留所から渡辺朋子さんも乗って来られた。8時10分に京都駅に着くと、もう鷺見さんが待っていられた。本日の例会を担当して戴き大塚御苦勞さんとお礼申し述べ2番ホームに行く。定期近くになると続々と参加者が集って来た。

石山から湖南バスに乗り田上(タナカミ)車庫前でバスを降りる。此の方面は来たことがないので立派な公園があるのにおどろいた。公園で準備体操のあと、本日のコース説明を聞いて出発する。太神山は行ったことがないし、矢筈岳も又同じ。湖南アルプスの未知の山々を尋ねることが出来るとは嬉しいかぎりである。

公園から動物博物館の前を過ぎ天神川に沿って不動さんに向って進み、迎え不動まで来てハタと気付く。どうも見たことのある地形だと思ったら以前此処で納山祭をしたところである。あれはいつ頃だったか、宮後部長と共に愉快地やったこと、途中で冬季に珍しい豪雨に見舞われ、河原から安全地帯に逃げたこと等が走馬灯のように脳裏を掠める。特に氏の愛唱した「山ノ大尉のうた」を合唱したこと、然し、今は氏も鬼籍の人と成り、来月は氏の初盆だ。あらためて故人のご冥福を迎え不動さんをお願いする。宮後氏よ安らかにねむってください。岡田新部長を迎え、京交山岳部は確実に前進してはりますから。

河原でさんざめく人々を尻目に歩を進める。この地点からあれ程多かった自動車も煙のようになり林道の終点に着き、それより小道を少し歩いて天神川にかかる橋を渡った地点で一本立てる。

それからは山道らしくなり、じくざくと進んで行くと突然明るい伏採地が右手に現われ、右、矢筈岳、左、枝町と書いた指導標が立っていた。鷺見さん、三橋さん、田中さんと四人で確認のために土手の上に登って前方を見ると矢筈岳が、こちらですよ。と呼んでいた。

不動寺の立派な宿坊を後に山頂に行ったら大勢の参拝者や、ハイカーで座るところもなく、我々が三角点に行くと低い檜のうえもハイカーに占領されて点標石にさわることも出来ない。そのハイカーも動こうとしないので空しく眺めて引き退った。まったく無礼なヤツ共だ。我々に想像も出来ないことを平気でやる、もっともこれがハイカーの特権かも知れないが。

不動寺の和尚の御好意で健物の内に入れて戴き、食事をさせて貰う。なかに般若湯を拝受した不粋なヤツのいなかったのが幸いである。

和尚の御厚情を深謝し先程の岐れ徑を左へ矢筈岳へ向う。

少し歩き易い小径を行くと植林した地点で径が右へ急折し、矢筈岳を左に北へ急降下しているらしいので、三橋さんが先頭集団を止めて植林地を調べに行ってくださいました。矢張り、矢筈岳への径は植林のため一部消失していたが、すぐ向うに赤いテープが見付き安心して進むことが出来た。小さな起伏を忘れる程くり返してやっと独標562m矢筈岳の山頂に達した。360度の景観を賞味したあと、少し今きた径を戻り左へ降りて行くと、迎え不動から笹間岳へ向う小道に出る。迎え不動えの道を右に見て、次の目的、笹間岳と全員快調にとばし、小さな池を通り過ぎると広い河原に出る。そこから右へ笹間岳への最後の登りに取り付き、少しも弱った者もなく全員笹間岳△433mに到着した。此処は太神山と違って我々のパーティだけである。万才三唱のあと、早速鷺見さん先頭に全員山頂の大岩壁の上に立って(但し交代で)愛宕山、比叡山、ピワ湖等の景色を満喫した後、下山した。

後記 笹間岳は数年前に一度登ったことがあるが、太神山と矢筈岳は登ったことがないので大変嬉しかった。今迄は湖南アルプスなんか、山屋の行く処でない、ハイカーの行くところと思っていたが、仲々どうして大変。変化にとんだ面白い山である。部員の方々も是非一度行かれることをお奨めします。太神山不動寺入口石仏のユーモラスなお姿が印象的であった。

今回湖南アルプス山行をお世話くださった鷺見、田中両氏ありがとうございました。おかげで又見聞が広がったことを心から嬉んでおります。

〔参加者〕 津田 F 1、奥村、石田、渡辺朋、谷尾、三橋 F 2、原田、鷺見 F 1、井戸 F 1、大杉、和田、出水、伊達 F 1、田中

(ゲスト参加) 立花、浜田、梅垣、古川、竹田

〔コースタイム〕

8:35 京都-9:05 石山駅バス乗車-9:30~9:55 枝町... 10:45 迎不動... 11:40 泣不動... 12:00 宿坊... 12:10 △太神山... 12:20~13:10 昼食(宿坊)... 分岐 13:20~13:53 緑のパラダイス... 14:03 矢筈ヶ岳急登口... 14:15~14:30 矢筈ヶ岳頂上561m... 15:26 仏河原... 15:36 池... 15:43 大谷キャンプ場... 16:20~16:50 △笹間ヶ岳... 17:50~18:16 上関バス停... 18:40 石山駅

## 厚生会夏山トレーニング

# 湖南アルプス

和田良一

厚生会夏山のトレーニング第二弾、前回の愛宕山~地藏山の参加者は、山岳部のベテランばかりだったとのこと、寂しいかぎりである。さて今回の湖南アルプスにどれくらいの参加者があるかなあと思いつつ集合場所である京都駅へ行った。正面改札口に鷺見さんがみんなを待っていたが、すでに他の人達がホームで待っているとのこと、時間が来たので、われわれもホームに行き、8時34

分発の国電で石山へ…。石山からは臨時のバスがあり、カブスカウトの子供達と一緒に乗り満員で発車した。約25分、田上の枝町終点に着き、バス停横の公園に集合し鷺見リーダーより、本日の行程及び全員紹介のあと、田中リーダーの合図で軽い体操を行い、そして総勢25名、東海自然歩道を目的地に向けて出発した。

天神川の河原をみながら、だらだらとした道を進みやっと迎え不動に着いた。さすがハイキングコース、人も車も多い。そしてこれからが人しか通れない道歩く。えん堤工事のため以前とはすっかり変わってしまった。

花崗岩のガサガサしたところや木立の中、南郷の景色をながめながら、第一の目的地「太神山」へと向う。やがて不動寺の山門をくぐり、しばらく行くと、太神山不動寺に到着。草津の歩こう会の人達と入り乱れて石段を登り、岩の上に立つ本堂をこえ太神山の頂上に到着した。

周辺は人も多く暗いので食事は下の広場で…と決まり、登ってきた石段を下り、広場で食事をしようとしたが、OBの奥村さんが、いつ手配されたのか不動寺の寺務所で食事をすることになり、全員卓を広げ、タタミの上での昼食となった。お茶、梅干し、アルコールの接待をうけ、とても山行とは考えられないひとときを過ごした。

しかし、今日の目的である矢筈ヶ岳と笹間ヶ岳があるため、昼食もそこそこに不動寺を出発。来た道を引返し、矢筈ヶ岳への分岐に着き、矢筈ヶ岳へと向う。しばらく行くと道が左右に分れており、右の方へ行ったらところどころおかしいということになり、もとの岐れにもどり、左への道を行く。このあたり工事がされたあとで道が不明瞭だ。そしていったん谷におり尾根道へとどんどん登る。そして尾根道を進むと、いよいよ急坂にさしかかり、みんなフーフーといいながら山頂に着いた。頂上は北側は見通しが悪かったが、南側は鷺峰山を中心にしてかなり広い範囲での視界が望めた。15分程休憩後、もと来た道を下り直下の分岐を左へ折れ、また尾根道を歩き、御仏河原から笹間ヶ岳へと進む。途中、木々が途切れ足をすべらせながら、谷底へ落ちるような岩尾根を歩き、石山、南郷方面の美しい景色をながめながら、433mの三角点に到着。頂上には台地状の大きな岩があり、その岩に登ると周囲を一望でき、夕方の景色をながめたあと一路、関津町のバス停へ無事下山し、現地解散としたあと、全員バスに乗り湖南アルプスをあとにした。

後日、16km程歩いたとの事古川さんや、井戸海平くん、三橋のコーちゃん、よく歩いてくれました。ごくりさんでした。また厚生会登山トレーニングとして企画された前回及び今回の例会も参加者の参加がもっとあってもよいなあと感じています。

## ▲お知らせ

8月の集会でOB伊藤氏より「他山岳会の会報を見せてほしい」との要望があり、京交山岳部として現在「京都山岳」「職味の登山」「山ノ会・青嶺」「北山クラブ」「山友」「比良山岳」「かもしか」「近畿山岳愛好会・1等三角点」等の会報を山岳部倉庫に保管しておりますので、閲覧希望の方は、担当(管財 大槻)まで申し出て下さい。

## 厚生会登山大会

# 尾瀬と至仏山登山

井上一夫

7月27日午後6時の気象衛星の写真を見ると、日本列島は、ほぼ晴天域にあった。僅かに津軽海峡付近と関東地方に雲の塊が見えるのみであったが、今年の厚生登山大会は関東地方に見えるこの雲の塊に苦しめられることになる。

7月26日夕刻京都を出発した総勢58名のパーティーは、名神、東名等を経由して10時間余りで戸倉の富士見旅館に到着した。旅館では長時間のバス旅の疲れを癒す間も無く山仕度を整えて朝食をとり昼食の弁当を手にし、ヤサカ観光バスから現地のマイクロバス2台に分乗し尾瀬登山の出発地である鳩待峠へ向った。

小雨の降る鳩待峠へは7:00に到着した。リーダーの訂合せの後名簿に合わせた班編成を行なった。鷲見リーダーの号令で準備体操を行ない体をほぐした。長時間のバスの疲れもみんなには余り見えなかったようである。

7:30 1班から班毎の隊列で出発する。目指すは至仏山。鳩待峠の小屋の話では今日は午後から天候も回復するとのことであった。天気なら鳩待峠から小高い丘のように至仏山が見えるそうだが、生憎の天候で山頂は雲の中であった。樹林の中のなだらかな道を少しづつ高度を上げていったが、未だ雨は降ったり止んだりの状態で傘を取り出して行ける所まで行動することにした。1ピッチ目はゆっくりとしたペースで体調を整えながら歩いた。歩き易い道も暫く行くと、ここ数日来降り続いた雨のためにぬかるんだ悪路になった。悪路が続くようになると足元に気を取られる人が多くペースは一段と落ちる。

高度が1900mを越えるようになると見晴らしの良い場所から尾瀬ヶ原と燧ヶ岳の裾野が一望出来た。出発から2時間でオヤマ沢田代に到着した。ここでパーティーを集結させ休憩の後出発したが、天候は一向に回復の兆を見せずにいよいよガスの中を進むようになった。暫くで樹林帯を抜けて岩と道松帯を進むようになった。道が岩尾根となる手前で休憩し、軽く食事をするようにと岡田チーフ・リーダーから指示があったが、握り飯一個だけとの指示ながらも空腹を満たすため2個とも食べた人もいたようである。

小休止の場所から直ぐに岩尾根となった。西風と雨が強く吹き付けており、ガスで視界も悪く全員カッパを付けるように指示があった。足場の悪い場所にいる人もあって少々手間取ったが装着する。なおも前進したが、小至仏山付近でリーダーの緊急協議で、悪天候と至仏山からの下山略の悪条件が予想されるということで、元来た道を引返すこととなり至仏山の登頂は諦めることに決定した。時刻は11:00であったが今までの登山道の悪さを思うと少々気は重いものの至仏山の方で雷鳴が轟いており、風雨も強くこれは当然の結論と言える。



小至仏山から2時間余りで鳩待峠に到着したが、天候は朝よりも悪くなっているような気がした。しかし、ようやく山道を脱出し、これからはルンランランの道を思えば心も少し軽くなっていた。ところが本当の試練はこれからであると誰が予想できたであろうか。

鳩待峠で再び腹に食物を入れ30分程の休憩の後、各班ごとに出発しました。早朝この峠を出発してからすでに行動時間が6時間を越えていることが少々気に掛った。あと下りと平地と言えどまだ4時間の行動が残っている。峠からの下りは板で整備された道が続き、擦れ違う人々と挨拶する余裕を持ちながら歩いた。この頃から時折り大粒の強い雨が降る天候となってきた。

道の傾斜が緩くなり川上川に掛る橋を渡ると山の鼻に到着。いよいよ、ここからは尾瀬ヶ原、美しいお花畑の中を歩く事ができる。期待に胸をいっぱいにして山の鼻を出発したが、暫くは目立った花が見当たらないのである。それよりも尾瀬ヶ原の木道を踏み外さないように歩く事に気を取られていた。牛首を過ぎた辺から至仏山の方を見ると山は真黒な雲に隠れて雷鳴が轟いていた。早く至仏山を諦めてよかったと思った。

この頃になると木道の両側が水につかっていることや、案内板が水につかっている、えらく低い位置に取り付けてあるなあと思ったり、オセコウホネという沼の水面に黄色い小さな花を咲かせているものが、完全に水中に没している事など、異状な現象に気付いていたものの我々が尾瀬ヶ原で置かれている状況を把握することは私自身全く出来ていなかったようである。

尾瀬ヶ原三叉路まで来たときパーティーは集結していた。山小屋での情報とルート途中で収集する。情報が乱れて混乱しているように見えた。鳩待峠の打合せでは竜宮小屋の手前の十字路を左に折れてヨッピ橋へ行き橋を渡って温泉小屋へ向う事になっていた。しかし、情報はヨッピ橋の吊り橋の手前が通行不能というものと、下田代方面へのルートが通行不能と全く両極端の情報がとびこんだ。情報源にも混乱があり、ここで暫く進路を阻まれた。結局のところ、この時点では両方のルートとも通行不能の状態であったと思われるが、どちらかは行けると信じている分だけ判断が遅れた。結果この三叉路を左に取りヨッピ橋の方へ進んだのだが、歩いた時間を考えると先頭は下ノ大堀川とヨッピ川が合流する所まで進んだのであろうか、そこでパーティーはストップした。辺り一面日光キスゲのお花畑の真中であつた。漸く尾瀬ヶ原に来て美しい花の群生を見ることが出来た。しかし、何故ストップしているのか状況が分からない。

そうしている間にリーダーから最後尾を付いて来た3班の方へバックするようにとの指示が出た。通行不能の情報を得たとのことである。三叉路まで戻ると丁度小学生の多勢のパーティーが三叉路を通過中であつた。竜宮小屋方面のルートは大丈夫と一瞬安心した直後、このパーティーもストップした。ついに三叉路で立往生してしまった。チーフリーダーは無線でラストと交信中で種々の情報を交換分析していた。小学生のパーティーは暫くして竜宮方面へ出発した。(小学生の宿泊予定の小屋の人が迎えに来て道案内をしていたとこのことを後で知った。)その後、チーフリーダーから竜宮小屋方面へ出発の指示が出た。付近は雨雲のため薄暗く未だ時間はあるのに日没近く感じられた。至仏山の方で先程まで鳴っていた雷が巖ヶ岳の方に移って空中放電しゴロゴロ鳴り出していた。出発して間もなく木道が水で浮き流出してしまっている所へ来た。幸いにして水の流れは無い

よりである。雨足が強くなってきた。悪い事に今迄空中放電していた雷が地面へ放電し始めている  
よりで、虎視眈眈と我々のパーティーを狙う意地の悪い雷の姿を想像した。いつここに落雷しても  
不思議と思わない心理状態であった。

木道の板は増水のため浮き、それを何人かで踏んで沈めると30~40cm程沈んだ。その板を浮  
かさなげにしながら少しづつ進んだが、その姿は百足競争の様であった。そうやって板の上を歩  
く事が何故か一番安全に思われた。何故なら木道を外れた所が深い泥沼でないと誰が言い切る事が  
できるであろうか。

ここまで来て漸く異状な増水の中にいるという状態を認識する事ができた。三叉路から竜宮小屋  
までが非常に長く感じられた。竜宮小屋には最後の方で到着したので小屋に入る余裕は無かった。  
全員集結し点呼確認した頃は一際雨が強く降っていた。この強い雨の中を出発した。小屋から直ぐ  
の沼尻川は桁ぎりぎりに増水し可成りの勢いで流れている。まもなくこの橋も通行不能となるで  
あろう。渡り切ると樹林帯から再び尾瀬ヶ原の真中に出た。雷雨はいぜん続いていた。見晴十字路  
では止まらず左へ折れて温泉小屋へ向って先を急いだ。残り1.9kmで約20分余りの距離である。  
この頃雷は少しおさまっており雨も小降りとなってきた。温泉小屋の手前の川も増水していた。そ  
の川に掛る橋を渡った時、カッパ姿の1人の男の人と擦れ違ったが、実はこの人温泉小屋の人で我々  
を迎えに来た人だったとのこと。もう5分程で小屋に着くという所まで来ていると思ったので、班  
の人に元気付けにそう言ったとたんに隊の進行が止まった。

リーダー集合との事なので前へ行くと細い川が濁流となっており、板橋が流されてしまったよう  
だ。リーダーは渡渉方法で協議、岡本さん達は渡渉地点を探しているも良い場所が無いようである。  
それと平行して細引きやシュリングを持っている人達はだすよう指示がでた。そうしている間に先  
程の小屋の人が戻って来て、温泉小屋に応援を要請に行つて来るとの事であった。待つ間も渡渉も  
しくは引返して別の小屋へ泊るかなどの協議もなされた。

2人の小屋の人が伸縮式のはしごを持って来た。急流にはしごを掛けザイルを渡して1人1人シュ  
リングとカラビナで確保しながら渡渉を開始した。リーダーの指示よろしく渡渉は大した混乱も  
無く完了し全員が小屋へ到着した頃には辺に夕靄が迫っていた。

夜になっても雨はいっこうに止まず、最悪の場合はもう一泊を尾瀬でする事なども考えたが幸い  
にして足止めを食う事は無かった。翌28日は午前中こそ雨は残ったものの尾瀬沼から燧ヶ岳の景  
観を見られて、大清水からヤサカ観光バスで草津温泉へ全員無事に向いました。

27日の集中豪雨は尾瀬の各地で異状な事態であったようで、温泉小屋の手前の急流の渡渉も小  
屋の人に聞けば初めての事であったと言う。沼尻の休憩小屋で会った人は、沼山峠から尾瀬に入  
ったものの宿泊予定の小屋の手前の川が増水して橋が流れてしまい、苦勞したとの事であった。そ  
して、我々が尾瀬に入った鳩待峠への道路は通行出来ず、7月28日に尾瀬へ入る道は大清水が唯  
一とのことであった。異状な気象条件や増水の中で負傷者を1名も出さず全員無事に草津温泉へ到  
着したと言う事が行動中の反省点はいくつかあるかもしれないが、登山の成功と言えると思う。

山行中いろいろと御協力下さった皆さんにお礼申し上げます。7月28日全国的に梅雨は明けた。

尾瀬にも今はもう夏の日がサンサンと照り輝いていることであろう。

[コースタイム]

- 7/27 戸倉 6:30 - (バス) - 7:02 鳩待峠 7:30 ... 9:35 オヤマ沢田代 9:40 ... 10:55  
小至仏山 11:00 ... 11:35 オヤマ沢田代 ... 13:14 鳩待峠 13:50 ... 14:49 山ノ鼻 14:55  
... 15:28 牛首 15:33 ... 15:40 尾瀬ヶ原三ツ又 ... 中田代 (下ノ大堀) 16:00 ... 尾瀬  
ヶ原三ツ又 16:30 ... 17:09 竜宮小屋十字路 ... 17:10 竜宮小屋 17:15 ... 17:38 見晴  
小屋 (下田代十字路) ... 17:55 温泉小屋手前の小川 19:09 ... 19:10 温泉小屋 (泊)
- 7/28 温泉小屋 6:55 ... 7:16 見晴小屋 (下田代十字路) 7:20 ... 白砂峠 ... 白砂湿原 9:00  
... 9:15 沼尻平 10:00 ... (尾瀬沼南廻り) ... 富士見峠分岐 10:33 ... 11:00 三平峠 ...  
12:11 岩清水 12:20 ... 12:45 一之瀬休憩所 12:50 ... 13:30 大清水 14:20 - (バス)  
-草津温泉ホテル 一井 (泊)

## 厚生会登山大会と尾瀬至仏山登山所感

岡田 茂久

厚生会登山も第一回富士登山以来今回で14周年を迎え、今回は趣向を変え「尾瀬と至仏山登山」ということで計画した。監督官庁の監査等が運悪く重なり他に業務の為得む止ず参加をあきらめた人も多かったようだが、山岳部OBの懐しい顔ぶれも見られ、58名で5班のパーティを組むことができた。ちなみにリーダーを除く参加者内訳は、山岳部員、OB部員25名と一般職員、家族33名であった。

尾瀬を対象とするうえについては、至仏山もしくは燧岳登頂を含むということは、当然のものとして我々は考えていたのだが、中には尾瀬ヶ原だけ歩けばいいという参加者もあり、特に尾瀬ヶ原や尾瀬沼が1400mから1600mあり、1700mの峠越えを必要とすることも知識になかった人もあった。これが後に齟齬を生むことになる。我々は事前にPRシトレーニング例会への参加も極力推奨したのだが、例年とも山岳部員以外の参加者は寡少で、脚力・体力等のチェックはもとより山の様子・行動・装備に対してもパンフレット以外適切なアドバイスができず、トレーニングなんかいかんでも参加すれば山岳部が連れていってくれるという旅行的な気分の方が一部あるのも又事実である。我々は決してその労を厭うものではないが、厚生会登山においても登山に変わりはない。その登山においてはリーダーは少なくともそのパーティのメンバーの体力・能力等を適確につかんでおかなければならないが、厚生会登山においてはそれが充分にできず、いわば即席に近いパーティ編成で実施しなければならぬむずかしさがある。第10回富士登山を筆頭に今回を含め毎回のようにそのあたりが問題にはなっていたが、幸い山岳部諸氏の強力な力添えでそれをカバーすることができ、例年又本年も無事故で成功してきてはいる。しかし我々が常に唱している安全登山を全うするならば、我々自休謙虚に自戒し、山岳部例会とは全く異質の厚生会登山のような一般参加者が大部分を占める山行を安全にリードしていくには、どうしていけばよいかをその行方を含め充分検討

していく必要がある。

今回の尾瀬は厚生会登山としては富士山以来の異例の天候異変にみまわれた。事前にコースの状況・天気図等は十分に検討したのであるが、全く極地的な地元においても過去に例のない集中豪雨と雷の襲来を受けたのである。

前夜の雨で尾瀬ヶ原一帯が普段より幾分増水しているということは、山小屋で情報を得、又ルートアドバイスを受けたのであるが、尾瀬ヶ原途中で豪雨となりみるみる増水、板道が流出しいたる所でルートが切断されるということは、途中の山小屋においてもまして我々において予想もしなかったことである。全く短時間の出来事であり山小屋間の連絡も充分でなし、色々の情報が交錯し我々はそれに振り廻されることになった。結局我々が最先端の状況を情報として流していくことになる。これが少人数のパーティであれば、突破も又引返してどこかの山小屋にとび込むのも容易であったろうが、故障者を含め60数名のパーティでは、時間が掛ろうとも安全第一を考え目的地へのルートを選択する必要があった。もっとも豪雨の中で板道の上に長く延びきったパーティ全員にその状況を充分に説明し安心感をもたらすには現状では無理であったかもしれないが、その努力はもっとすべきであったと反省している。

尾瀬では必ずといっていいほど午後には夕立があり雷が鳴るとの情報も聞いた。それでも過去には落雷による死傷者はでていない。もっとも今回もないとは言いきれないものの、豪雨の中では落雷はあまりないと、避雷設備等は考えられない原の真中で体を伏せ雷の通過を待ち、水中で日没立往生することを考えると適切な以外はないと判断した。それにしても27日午後より28日午前4時頃まで継続する雷は全く異状としかいいようがない。

温泉小屋直前の橋の流出による渡渉は全くおまけであり、ガックリきた人もあったようだが、リーダー連のテキパキとした作業と、山岳部員各位のフォローよろしく無事混乱もなく渡渉できたのはさすがと思わせました。

結果的には、至仏山は登頂できず尾瀬では水中をはいずり廻っていい所は少しもなかったようだが、尾瀬は全員に強烈な印象を残したことであろう。それでも厚生会登山としては全員無事ということで成功といえる。しかし我々に尾瀬ぐらいという気持ちがあったのは否定できないことであり今後の戒めとしたい。

若いリーダー・サブリーダー諸氏には良い意味も悪い意味も含め、よい勉強になったと思います。と苦労さんでした。又山岳部諸氏も大変と苦労さんでした。

## 花の平ヶ岳

木原 滋

深田久弥が「日本百名山」でこの山を書いている。至仏山や釜岳、会津駒から見ている筈なのに

どんなかこうをした山か、全く姿がうかんで来ない。最近では頂上付近の写真が山岳雑誌にも出ているが、近年まで登る人もほとんどなく道もなかった。「ヒラガタケ」と云う山らしくない名前も登る人の少ない原因のひとつではないかと思う。「そない云うけど、こんなええ山に便利な登山道が出来て、尾瀬の続きにどどん人が来たらどないになりますねん。」なんて考えると、目立たない名前もよかったのかも知れない。

二年前に会津駒ヶ岳に登った時、平ヶ岳登山口を通り、裏邊の上田代から平ヶ岳を見た時に、次にここへ来る時は、あの山に登ろうと心に決めた。その後何人かの山の友に「平ヶ岳に行かないか」とさそったが、「行こう」と云う返事は聞けなかった。そこで、今年こそは、と考えて屋久鳥や石鎚山の友で、長女出産のために山に行きにくくなっていた森君に電話すると、これ幸いと(どう云う意味や)すぐ計画が出来てしまった。他に万木君、塩見君が来ることになり、参加者は4人になる。平ヶ岳登山口に一番近いのは清四郎小屋で、どのコースから行っても京都から丸一日かかる。北陸線の長岡から、小出、銀山湖コースとか、東京から鬼怒川温泉、会津檜枝岐もあるが、はじめてこの付近の山へ登る森君の意思を尊重して、沼田、鳩待峠、至仏山、尾瀬ヶ原、渋沢温泉から清四郎小屋に出ることに決定する。

7月16日(土) 19時17分発、新幹線で京都発。上野から尾瀬号で沼田へ、タクシーで鳩待峠に着いたのは17日午前3時30分。沼田から降りだした雨がやまないので至仏山に登らず、直接山ノ鼻へおりにすることになる。4時に鳩待峠を出発。(尾瀬については、今年の厚生会の登山大会の報告におまかせして)山ノ鼻、竜宮、見晴、三条ノ滝、栗田代、小沢平と歩き、バスで鷹ノ巣の清四郎小屋、15時着。山の民宿と云う感じで、さっそく風呂に入れたのが何よりうれしい。

18日、4時に目が覚めたが風雨強し。寝る前には「明日は雨でも出発しよう。」と決めていたが、登りだけで6時間以上かかると云うことと、夜行の疲れで気が重く、何となく「やめにしよう」となってしまった。8時起床、今日はどこへ行くのか? 当初の計画は、一応21日迄の休暇で至仏山、平ヶ岳、燧岳、奥鬼怒となっているが、一日停滞すればどこかをカットしなければならぬ。

あれこれと希望があって、塩見君は、どうしても奥鬼怒へ行きたいと云う。森君は会津駒ヶ岳へ登って見たいし、平ヶ岳はあきらめても燧岳へ登りたい。「ここまで来ていて登らなければ、平ヶ岳は二度と計画出来ないだろう。」と云うのが万木君で、僕は、何としても平ヶ岳だけは登りたい。

結局今日は、森君と塩見君が会津駒に行き、僕と万木君は尾瀬沼で遊ぶことになる。バスで沼山峠着10時。大江湿原を歩き尾瀬沼へ出た頃、すっかり青空になり清四郎小屋には夕方までに帰ればよい。山へ来て尾瀬のようなきれいな所でゆっくり時間があるのは本当にしあわせだ。バスは沼山峠14時10分発、車中左手に平ヶ岳が名前と全く違う堂々とした姿を見せている。疲れもすっかりとれたし、「あしたは登るぜ。」

19日、3時起床。昨夜着いた前橋の女の人(オバハンである)2人が、平ヶ岳へ登ると云うので起してほしい、とたのんでおいたら、まだ3時だ。とにかく起きてしまったのだし、早く出た方が上でゆっくり出来る。弁当もあるし、ナップサックも用意しているので3時20分発。15分で登山口着。先発の2人が待っていて、「ひとりの足がおそいので、早い方を一緒につれて行ってく

れ。」と云う。少し林道を行くと登りとなるが、まだ真っ暗だ。少し明るくなった所で朝食にするが、細い尾根すじは木が切っているので鷹ノ巣も尾瀬口方面もよく見える。急な登りは2時間位いで終り稜線に出る。左の雲がかかっているのが燧岳で、前方右のずっと向こうが目的の平ヶ岳だ。

三等三角点のある台倉山をすぎると、少し下りとなり水場がある。出発から4時間歩いたが、平ヶ岳はまだはるかに遠い。さらに1時間、急な登りをもう1時間頑張った。9時50分に姫池の原に着く。標高は2000mを越す草原に、大小の池塘があり、小さな谷の向こうには平ヶ岳頂上がゆったりとした姿を見せている。ここまで来たらもう頂上は手の内だ。同じような山頂に池塘があるが、苗場山頂や、会津駒の中門岳とまた少し違っていたい所で弁当をひろげ、コーヒをわかせて、つい1時間をすごしてしまふ。朝早く出発したおかげで時間はまだたっぷりある。頂上は後にまわして先に玉子石に行くことにした。草原を右に入り約20分で木道が切れ、背たけ位いの樹林を50mほど行くと、前方がパッと開ける。写真で何回か見た玉子石がすぐ前の低い所にあり、その向こうに絵のような美しい池塘の原を見おろす。さらに奥只見の向こうには、越後三山をはじめとする越後の山々が大きな展望を見せている。平ヶ岳を遠くから見た印象で、ベターとした山を想像していたが、以外に変化があってスバラシイ所はまだまだある。

残雪を踏んでお花畑を通り、小さな沢を渡って少し登ると、どこが最高点かわからない。ここも広々とした花と池塘の草原だ。越後、会津、上州と奥日光の山々も一望で三角点を少し離れた場所に「平ヶ岳、2141m」の標識がある。

12時30分、やっとのことで前橋のおそい方が登って来たので姫池へもどったが、さりがたい気持が強く、また座りこんでしまふ。天気は上々、僕等以外に誰もいないこの静けさ、まさに雲上の楽園だ。ここえ来てからもう3時間もたっている。帰りの遠さを考えると、これ以上はいられないと13時に出発。来た時と同じ道を引き返す。

台倉山までは足が軽かったが、急な下りになった頃から休憩も長くなる。しかし右側には、燧岳が尾瀬や御池から見るのとは全く違うカッコ良い姿を見せて、シンドイのをなぐさめられる感じだ。

17時40分、清四郎小屋着。靴をぬぐのもおっくうで、玄関にすわり込んだままレモンジュースをのんで、やっと人ごちがついた思いだ。

20日、小雨の中を燧岳へ登ると云う万木君を御池で見送り、鬼怒川温泉、東京と乗りついで、17時41分京都着。今回は4日間で、山は平ヶ岳だけしか登れなかった。それでも十分に満足した山旅だった。

# 山 癡 雑 記 二十一

伊 藤 潤 治

今春、広島武田芳子さんと次の登山は、雉子ノ目山、コーモリ(冠山)、大万木山、琴引山等をお約束してきた。そこで八月上旬に、大万木山、琴引山、女亀山だけでも登ろうと思ったのだが武田さんのご都合がよくないこともあって、塩見岳が行きたくなり、どちらえでかけようか天びんにかけている内に、古い登りそこねの道斉山、堂ヶ辻山、縫ヶ原(荒島岳)を思い出し、こんな折こそ、これを片づけるべきだと思った。だが八月に入り、いよいよ予定日を迎えるというのに、しんどくて、とうとうエンジンはかからなかった。

9日は部費納入や、預かったシルバーコンパスを三橋君に、MHKテキスト「後山」「花見山」を大倉君に、等で久しぶりに部員集會に出席する。席上、係から原稿をたづねられたが、私は去る七月は担当例會をなくしたくらいだから、原稿の用意はなかった。考えると、暑くても山をのぼっているのだから、報告原稿も頑張る義務があるような気になった。やはり部員集會には出席すべきである。

七月十日(日)は、三草山を川西市在住の次男一家とのぼった。彼等の住居も三草山と同じ「広根五万」にあり、その身近かさから今年の「こどもの日」は大峰山にかけたが、その折の孫娘はあそこ、ほらあれが誰それ君という学友のお家やと、道中でもさかんに張り切った。次いで六月十二日(日)は、彼女の九才の誕生祝福のため、能勢、妙見山をのぼりだすと、おじいちゃん、ここならいつも速足にきているよ、こんなのはお山のぼりと違いやないの、しょうもないなー。とぼやいた。三草山はこんな可愛い豪傑のお供である。

能勢電鉄「妙見口」で集合すると、「出てこい出てこい」といわれて、ママ(次男の嫁)も参加である。こうなると△543.3m(出屋敷・堂床)は麓山だから割愛し、三草山だけをのぼることになり、一庫ダムからR173号に出て北上し、千軒の先で左折、民谷を経て猪名川町上阿古谷に入り、折よく出会った主婦に三草山をたづねると、山頂まで車で行けるように説明していただき、やはり登山口は此処でよかった、よかったと馳けのぼった。

車道はつづいていたが、栗畑の370m地点で駐車する。車道はあと約400mほどで下阿古谷から三草山に至る破線路とクロスして終っており、山頂まで車行可能とは、途中にあった二本の右折道、この何れかであろう。しかし車で一気に上っておれば、孫から不満をならべられるだろうから間違ったことに悔はなかった。

破線路は日射しの強い尾根にあり、私は日傘を使用する。図上でみる行程は一キロたらずなのでゆったり道草を喰って行けると思った。だが、一寸先は闇とはよくいったものである。すぐ尾根は伐採後、年を経た雑木、有刺雑草等が茂り放題でまったく道形が分からなくなってしまった。

家族づれのこんな場合、別方向のコースで入りなおすか、それとも登る山を変更する方がよいのだが、孫の郷土愛のために、兵庫県側のルートにこだわったのと、同行の孫やママから「いや、いや、」がかからなかったので、日頃の血路を開いてすすむ癖が出てしまい。一キロまるまる藪であっても突破できる自信があり、後に退かなかった。実はこんな行為がいたく孫に気に入られ、好まれているのである。

思惑と違い道草は、鉈を使ってたっぷり時間を喰われたが、立ちふさがったのが面白い。山名の如く、有刺植物、笹、ススキの三種、おかげで汗みどろになったが、ほんに三草山だと思いと痛快であった。藪から疎林に入り、キャシヤな笹と格好いいクヌギ林を経て、うっそうたる老樹の立ち並ぶ府県境をたどっていくと $\Delta 564 m$ は思いがけない広場にポーンとしていた。

孫は、まるで運動場のような頂上だからあばれ廻って上きげんで遊んだ。二時間の滞頂中に、森上コースからという高年のご夫妻一組が、途中で迷いましたと言って登ってこられ、しばらくで往路を引返された。帰路は「ねむの花ざかり」が回った。遊びつかれた孫も熟睡したので、川西に寄って帰った。おわりに、あの頂上には車道は通じていなかった。

十三日(木)は、東山を湯畑車庫にいた東昭次君の停年退職を祝福するため、長命の縁起でよき名の寺があり、能、長唄などに芽出たきもののある竹生島、これを図名にしている岐阜十六号図葉から、東山を「あづまさん」ともじり、「東山 $\Delta 595 m$ 」を登った。

メンバーは、東昭次、河村敏夫、松浦勇次(JAC岐阜)諸兄と私、国鉄山科駅前集合、東昭次君の愛車で発つ。

東山(ひがしやま)は、マキノ町観光協会、1968年5月22日の資料だが、「七曲り道がもっとも景色がよいようです。」とあり、コースはこれにしようと現地に至ってたづねると「ガンケイ寺」裏の車道終点からが楽ですといわれた。その楽な終点につく、伐採斜面の下である。これもマキノ町全図には景勝寺から田峰観音道と註記して朱線が入り、七曲り道とは大前神社(ゴンゲンさんの称もあり)上部で合っていて、楽な理由はトラバースによるからだと思った。

伐採斜面右上 $250 m$ で、東山北峰西尾根にとりつき、右、植林、左、雑林。涼しげな鳥声の満つる緑陰をのぼる。 $330 m$ でトラバースにかかった。それがどうした事か続かず尾根に上らねばならなかった。

トラバースをあきらめて雑林をのぼっていると、 $420 m$ 地点で左に伐採斜面が現れた。あとわづかで尾根の左折点である。尾根筋の伐採道をぬいながら露岩のある $550 m$ 地点、ここから自然林にすっぽり被われたかすかな踏跡になるので、爽風のあるのを幸い何度目かの少憩をとった。

北峰で右折してから踏跡はみだれ、断続した。本峰寸前になって意外な登山道が左から現れる。この道は西浅井町から登っているようだ。

山頂には木立とともに方形のヤグラと二等三角点があった。この頂きで本願、東昭次君の停年ご退職をグループと有志よりのささやかな記念品で飾り、一同が心から慶びの乾杯を捧げ、彼をめでたく祝福した。そのあとせめて竹生島だけは俯瞰したいと旧峰の観音をめざしてみた。下れども下れども素晴らしい森陰がつづき、この分では大前神社まで下っても竹生島の大観は不能と思ひ引



返した。下山に際しあきらめきれぬので方形のヤグラから背伸びでのぞく。やっと小景ながら竹生島に對面でき、めでたしめでたしで往路をP(パーキング)にもどった。めでたい気持を一層めでたくはずませよとの話がまとまり、俄かに箱館山へ寄ることになる。

無雪期でもロープウェイが営業中で駅員から△ならロープウェイにかぎります。車では無理だという。まあ その方が楽である。商魂にのせてもらって△を稼いだ。△は一等だが、中腹で木立に囲まれていた。けれど朽ちかけた武骨な旧式ヤグラと△はひっそりとした環境にあってとてもうれしかった。見晴台駅付近では、竹生島、東山の大観をたのしめたり、ロープウェイ・金1300円也の価値はあった。次いで今津の魚清に寄り、琵琶湖名産小鮎、モロコの佃煮をかいこみ、この東昭次君退職の集いをめでたく結んだのであった。

二十四日(日)は、糸瀬山(第1442回例会)だが、この山を見初めたのは、大釜沢山、笠ヶ岳をめざした1975年9月やと1980年8月に出向くと雨、その師走の再訪では俄雪。このように立てつづけに脇鉄を喰わされたまゝになっていた。ついでに当時のコースを説明すると八月は、松淵沢林道(S50新設)の関西電力送水鉄管(地上部)の階段からであった。師走は、田光(たこう)水沢地籍の営林署、304林班(821.5m境界標)からであったが、この行では須原二万五千図にこの部分の省略を発見する収穫があった。

なお大桑村役場観光係からは、野尻営林署管内の国有林であり、最近は施業が行われていないため、入山をひかえてほしい便がきていた。こんな糸瀬山だが私は夏に弱いので、若き精鋭、三橋勉君に担当をお願いした。それにこれまで吹聴してきたので、大垣在住の親友、藤井茂雄、石原順次、小西利雄諸兄の激励ご参加がいただけた。ようやく出発日を迎えると、梅雨前線が居座った「島根山口の集中豪雨」による被害が報道された。被災地の惨状をきいて戸惑ったが、木曾の山にはあまり影響がないと判断、計画の一部、天幕を民宿泊りに変更して三橋君と大垣に至り、石原、小西両兄とともに、藤井兄の愛車で予定どおり出発した。

京都から滋賀も岐阜も天気はなく、中央高速道に入ると周辺の山が鮮明で、月齢12.6日の月が芽えかえっていて、梅雨明け空のようであった。このたびの登路は、地形図が省略している小骨のような尾根、つまり田光コースを私は志向してきたのだが、民宿「すはら」女史から、地元開設コースをきかされ、地元精通者の紹介助言等お骨折りいただいて、今回は登頂して帰りたいので女史のご芳情に従うようになった。部屋が涼しく、流石に木曾だと早々床につく。

物凄いな音で気がつく、何たることぞ、雨が降っていた。未明のことである。天幕泊りをしていたなら、さぞ惨状を呈したことだろう。夜明けに雨はやみ表に出ると、ガス一つない糸瀬山があった。須原の朝は、私たちの出発時にまだ軒並み扉をとざしていた。松淵沢林道に入り、「関西電力送水鉄管」箇所を通過後、女史の説明どおり「糸瀬山登山口」の標があり、行動を開始すると雨が降りはじめた。

ちゃんとした登山道があると分れば、ちょっとやそっとの雨では、ひるみよりも雨具をつけて堂々とのほりだす。登山口、860m地点、糸瀬山(△1867m)まで三時間ですと、女史はおっしゃっていた。大した雨でもないのにゴアテックスを着用したので暑くて不快だった。やはり合

羽はあつい、無風であったから雨傘を用いるべきであった。東へ約100mのぼり、トラバースで松原横手(△1091m)東尾根に至り、左折して△の北で破線路にのる。コブの右をまいた先に「イチヨウ谷(一ノ谷)」と「山頂へ二時間二〇分」の標があった。ルートは樹相も尾根も雨をふくみ、さまざまな緑色の美観を呈していた。ミツナラと笹の風情がたまらなく美しかった。「胸突八丁」は「やわ土」「急斜面」「雨」の条件がそろい、滑って嫌だった。

そのあと「丸屋の鳥屋」「まむし坂」の標を見てのぼっていく。雨は糸のようなのがふっていた。そんな1,500m付近で、コマドリの思いがけない鳴声のプレゼントがあり、ききほれて歩く。巨樹の木間をウグイスの美声が流れていた。1,600m地点で、コーヒ・タイムのひとつときをすごす。導標はあるが超然と点在する倒木群、のびのびと大樹の笹原に立ちつくす風景は、深山秘境の姿である。導標といっても、実につつましきものであって茂りきった区域ではコースを外してしまう程で自然にとけこみうるわしい。

頂上へ四十分の指示ある「青ナギ」、風化斜面が伊奈川へ落ち込んでいて晴れていれば眺望をたのしめそうな尾根だ。「しらべ平」から「ふるさと展望台」を経て二等三角点に到達した。標石は岩上に据えられてあり、側にも岩がならんでいる。現在は暗いほどの樹林だが、埋設当時は坊主山であったような気がしたもので、点ノ記の「障碍樹木ノ有無伐除ノ数其樹種」をみると、「檜松縦樫等一尺八寸廻以上、五尺三寸まで四百八十四本(以下十二文字意味不明のため省略)」とあり、この高所にして、なお亭々たる森林、これが木曾の山の正体かと恐れ入った。

ちなみに「標石」にふれておく。「盤石上柱石ノ高サ」は「零米三四五、盤石ハ天然石ニ穴ヲ設け表示シ柱石ハコンクリトニヨリ埋定メ防衛石ナシ。」少しはなれて「のろし岩(くすべ岩ともいふ)」の巨岩が立っている。攀ちのぼったのは三橋勉君だけ、展望はなかったそうだが、爽快きわまりなかったことだろう。

往路をもどり松原横手△1091mに寄ってくつろぐ、その頃から薄陽がさしはじめ往路のトラバース地点では、木曾川右岸の△1459m(木賊川水上)が大きくのぞめ、下山して着換えにかかる頃はすっかり晴れ上り真夏日の暑さであった。雨中の苦行をなつかしむ話に華を咲かせて大乗村を上きげんであとにしたが、間もなく信じられぬ事だが雨が降りだした。

私の糸瀬山は、雨にはじまり雨に終る。なぜか、しつこく雨にひびられた珍しい山行であった。あとになったが、宮崎日出一兄は1981年10月31日糸瀬山をご登頂で、ご紀行は「山岳巡礼第二十二号」にある。

## 伊 吹 登 山

7月14日、15日(雨)

畑 照 人

思えば今から〇十年前の8月4日、近江長岡駅からスタコラ歩いて登山口へ着いた夜、大雨に降

り込められて仮設天幕の中で一晩中蚊に攻められて大往生して翌日の一番列車で帰宅した私達一行は紅一点を含む6名であった。私はそれ以来、機会を待っていたが遂に本年7月14・15日勤務先の某女子高校の年中行事に特別参加という名目で同行を許されたのである。先生・生徒全員48名である。前夜祭(これも恒例らしい)がこれ又大変賑やかなもので、ビデオ撮りで初参加者はもとより毎年参加のベテラン先生方の自己紹介で先生方の、ホンネ、タテマエ、表裏等々いろいろな面が知られてほんまに楽しかった。これで参加した甲斐もあったというもの。また生徒諸君の自己紹介も純真そのもので日頃ヤンチャな彼女等も一寸お勝手違いといった様子で実にほゝえましき光景であった。夜半0時出発の予定が雨の為おくれる。昨年も雨だったらしい。伊吹は雨が付きものかね。待つ事約2時間。準備体操して出発。以前から聞いていた1合目までの急坂、暗夜の山道は歩きづらい。雨衣を着けた身体から汗が吹き出る。7合目辺から下界の灯りも見え、ガス少し晴れて夜明けの気配で道もよく見える様になる。8合目から9合目までの九十九折の難所、雨にぬれた山道は滑るのである。9合目から頂上小屋の見える平担路、両側のお花畑はイブキトラノオの花盛りである。強風とガスで視界ゼロ、茶店で一服。所要時間は約3.5時間である。初めて登山したという生徒も矢張り若さだね。全員登頂完了する。先輩先生に三角点を教えてもらい写真とる。これが目的であるのだ。又々雨が降り出す。好天気なれば案内板の通り四方の山々が見えて素晴らしいものをほんまに残念だ。小屋でうどん注文。暖かくなった所で下山にかゝる。上る時に「この辺でよく道を取り違える事があるので充分注意して…」と云われていたのに迷い込んだ生徒あり、私より先を歩いていた筈なのに途中で私の後から歩いて来るのだ。悪天気で体調を崩した者を、皆が助け合いながら行くのも、これ又美しい友情である。リーダー格の先生方との信頼感や親密度も培われて何か得る所があったと思う。初参加の生徒達も大いに自信を得たことゝ思い、有意義な山行であった。2日続きの雨は初めてだとの先生の声。宿に着いて朝食、泥靴を洗い、衣服着換えて帰京準備。雨は本調子となる。歩いている時は「もう止めや。」と思うが暫らく経つと行き度くなるのが山の魅力だ。来年も参加約束、山よ晴天で迎えて呉れ給え。念願果して満足感一杯。昔から夜行登山が盛んだとか、そうだろうね。全く木蔭が無いのだから、日中は参るよ。

## 富士山

7月27・28日 晴

今から16年前の6月30日、7月1日のフジ山レポートの最後記に「富士山は外から見て楽しむ山であって、登るのにはあんまり面白くありません。日本一へ上るんだという決意だけで行くのです。然しまた行きたくなると思います。」と書きました。全くその通りで今年第2回目、前は一行4名で、私が会計・渉外・立案と中々忙がしい事でした。それで今回は旅行業者一任のバス利用です。五合目まで何の苦勞も無いバスツアーですね。浜名湖で昼食自弁、何と云っても名物の饅頭です。喰べなき、損とばかり注文しましたが、お味の方は余り良ろしくなかったですね。矢張り養殖物はあかん。観光業者募集の寄合団体(運転手2名、添乗員2名)一行26名です。家族連れの

グループが大半です。皆様気楽な気持で参加されたのでしよ。とにかくバスは五合目終点着。すぐ夕食です。可成りの量感でした。矢張り登山に備えてのメニューですね。

山案内人の注意をよく聞いて出発。皆中々の元気です。日が暮れかゝる頃からそろそろ列が長くなり体力の差が出始めました。途中馬に乗った婦人もありました。七合目辺で日が暮れ大休止。下界を見下ろして風に吹かれる気分は実によろしい。稲光りが空をつんざき、雲を染める景色はとも下界では見られない。空の一大ページェントです。皆感激です。天文学の臨地見学といったところです。ペースを落して歩き始める。夜で山頂が見えないのがよいのかも…。「次はあの灯の見える小屋で一服です。」と案内人の声で見ると中々高い所です。「イヤー あんな遠い所ね。ついて行けるかな」と心配の声もある。ポツポツ雨の滴が…。雨具着用。何とか八合目太子館小屋着です。(後で判ったが、これは八合目の一番下の小屋でした。)仮眠は山靴をぬぐだけで、雑魚寝で布団一枚を2人で掛けて横になります。暑い下界ではとても寝られندしよ。28日、AM 1:30 出立です。これからが全く難行苦行です。自信を失くした人はこゝで脱落。朝を待ってUターンでした。行けども行けども八合目の小屋があるのでしよ。本八合目とか正八合目小屋とかの看板があるのでしよ。これでは九合目小屋へ着くのは何時になるやら…。またまた道が急坂の石道となりました。日本一の高山へ上るのやからそんなに楽ではないと知りながらも矢張り苦しくて、つい泣言も出ますがね。然し気温は低い。余り汗も出ず、水も欲しくありません。九合目小屋で、ぜんざいを食して元気を恢復、私共が最後尾のしよ。添乗員の2人は若いね。スイスイだ。ようやく最後の石段を昇り登頂? 流石にヤッタといった感じだ。お天気は晴天。雄大な雲海を見てると矢張り来て良かったです。御来光も拝めたと云う事無し。下山道は事故があった砂走りコースは駄目。新らしく指定されたコースを下る。これから上って来る群集の服装のカラフルなこと。皆さん陽光を受けてさぞ暑い事だしよ。何しろ木が無いので全身太陽光を浴びるのだから、夜行がよいのかもね。下る私達は充実感で足も軽く心もはずむ、と云いたい所ですが、足が一寸変ですね。笑うという奴ですか。転ぶこと2度・3度。注意して見ていると他のパーティーでも転んで大笑い的一幕もありお互いにこれで良いのでしよ。楽しい思い出となつて何時までも語草となるでしよ。途中で残留組と合流して予定の時間に五合目へ着きました。

振返れば 大きな山、広い裾野 富士は日本一の山、 また何日か 逢いたい。  
一生に一度だけ登ればよろしい。二度登るは馬鹿、三度登ればどう云うのかな。来年も又、行きたくなるかも…。

〔参加者〕 畑 照人、 他1名

## 愛 宕 山

58年8月3日 晴

千日詣り当日は勤務だったので、3日お詣りしてきた。連日の猛暑である。地球全体の異常気象であるとのこと。今日は上り急坂を避けて梨木林道をとる。清滝川は家族連れの水泳客で賑やかで

ある。首無地藏さんで小休止。神社参拝、気温26° 此処までは気持よく上って来たが下りに表参道をとる。この道が先日の千日詣客のマナーの悪さでゴミ道と化し、空ビン、空カン、ビニール袋などゴミの持帰り運動も何のその、捨てなきゃ損とばかりの惨状である。水尾辻に新しく休小屋が建てられたが、その中もゴミの山だ。

坂田君に会う。例の水運び奉仕で全く暑いのに御苦勞様である。ゴミの山見て坂田君も同じ思いをしてるであろうね。今、ホトトギスの花盛りであったが風情台無しであった。

## 大 文 字 山

8月6日(土) 晴後雨

今日は土用中の薬草採取と例の地藏詣りであるが、出発がおそくなり天気予報通りの雷雨に見舞われて残念乍らお詣りは弘法大師堂だけであった。今日の暑さは最も烈しいと私には思われた。特に雨の降る直前の熱気は相当なものであった。タクシーの運転手さんの話では、河原町御池の温度計は40°を指していたそうである。薬草は目的達成です。マンマンさん御免ね。 合掌

## 例 会 報 告

例会No	目的地	月 日	天候	担当者	参加者	記 事
1439	三重ヶ岳	7月11日	晴	大倉寛治郎		都合で延期する。
1440	白滝谷	7月17日	雨	吉田 武		雨天のため中止
1441	千丈寺山他	7月23日	雨	大倉寛治郎		雨天のため参加者がなく中止する。
1442	木曾 糸 瀬 山	7月23日 ～24日	雨 後 晴	三橋 勉	伊藤 潤治 大垣山葵会 3名と同行	前夜、月夜の木曾の宿は涼しくてよかったが、朝激しい雨音で目覚めた。宿の女主人にルートを聞き3時間で登れますという話に乗せられて出発したが、途中、雨のため4時間あまりかかってやっと頂上に到着。もちろん展望は望めず、下山途中の松原横手Δ1090.5mでなつかしい太陽が顔を出した。

(コースタイム)

6:45 民宿「すはら」ー 7:10 ~ 7:20 車止… 8:00  
 松原横手分岐… 9:00 まむし坂… 10:31 青なぎ…  
 11:20 ~ 11:50 糸瀬山Δ 1866.6 m… 12:50 ~ 13:10  
 山居の鳥屋上部(昼食)… 14:10 ~ 14:45 松原横手  
 Δ 1090.5 m… 15:20 ~ 15:40 車止

1443	白山	7月6日 ~8日	晴	津田 実	村 寮松 大槻 貞従 原田加津子 三橋 勉	連日の好天続きで暑い夏の日差しを浴びながら白山から別山へと登ってきた。 次号報告
------	----	-------------	---	------	--------------------------------	--

## 雑 報

### ▲ 8月集会報告

9日 下鴨寮

出席者 OB 伊藤 錦林 武田、(新人)加藤、中村  
 本局 大槻、鷺見、川原、三橋、方山、和田 烏丸 大倉  
 高速 岡田、井上 洛西 広瀬 梅津 吉田

本日は高層天気図について広瀬担当にお話してもらいました。例会報告は雨で中止になった例会が多かったが、その雨にも負けず、木曾の糸瀬山、そして厚生会登山の尾瀬、至仏山にと元気に登った報告がありました。又千日詣りのような多勢の登山者の白山と別山がすばらしい高山植物があり、ルルン、ラランと楽しく登ってきたということでした。

〔入部〕 錦林 加藤 満生 S 9.8.9

左・田中里ノ内町87 TEL 701-3409

錦林 中村富美夫 S 25.1.21

相楽郡精華町山田中村30 TEL 07747-2-1030

本局 竹田 勉 S 25.5.28

伏・醍醐南西裏町10番地の12 TEL 572-1089

### ▲ 部費受領

市役所 木原 滋 OB 伊藤潤治

錦林 武田喜久郎、生田敏雄、高窪輝夫、中村富美夫、加藤満生

横大路 大西純一、進藤義治、福田延行、牧野 健、石橋徳親、中村恭子

本局 竹田 勉

高速 田村忠司、城 雅彦、大沢 泰

〔退職〕 本局 笈田 昭

帆布・流布  
テント・シート  
雨合羽

木村工業有限会社

京都市中京区ミブ車庫前  
TEL 801-5331(代)

名古屋営業所  
名古屋市西区児玉町7-30  
TEL 521-7541代~4

テニス用品  
スキー用品  
山用品

交通局の皆さん  
とりあえず 京菱へ  
満足のいくようにします

京菱運動具店

下・大宮松原上ル  
TEL 801-1331

一年中、山用品だけの  
プロショップ

おかげさまで創業1周年を迎え、  
店も大きく、商品も充実させて  
頂きました。もちろん開店以来の  
全品徹底バーゲン価格も続行中!



ログ ケビン

京都市中京区御幸町通給薬師南入  
☎(075)221-7569 ☎604  
(寺町の一つ西の通りの錦上ル東側)  
四条河原町(阪急河原町)より徒歩3分



真の専門店として  
好日山荘は前進しております  
山とスキー用具の

ことなら御まかせ下さい  
確信ある用具を

確信ある価格で……

好日山荘

河原町六角下ル東入

TEL 241-1731



山の本

山岳書 電話 / 本にて

無料配送

ゆかり書房

075(801)8333

昭和58年9月1日

京都市中京区壬生坊城町48

京都市交通局内

京交山岳部

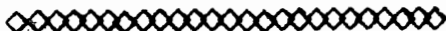


### お知らせ

今度、当チロル店舗は近代ビル改築計画に伴い、一時立退きと相成りました。改築期間中(約1年間)は、本店2階にチロルコーナーとして継続営業いたします。

# チロル

移転先 本店2階  
京都市中京区西ノ京町24  
ダイヤ運動用品株式会社



まかせて下さいませ

## 山とスキー

のことなら...

☆在庫豊富にとり揃えています  
☆山の道具はセヒ御相談下さい  
山とスキー専門店

# ビッグホリイケ

河原町店 上・河原町通丸太町東入  
TEL 222-0868

御婚礼  
御引越



## きおん菊水運送株式会社

山科駅車センター  
京都市山科区西野山曙町12-12  
TEL (075) 581-3101  
本社  
東山区大和大路通四条下ル 541-2345  
真川営業所  
中京区室町二条上ル 256-3059

結婚引出物・内祝・開店記念品・粗品  
仏事用お返し品・お中元・お歳暮用品

贈答品総合センター  
厚生会指定  
サンコー クラフト  
西島輝雄

左・川端通丸太町下る下堤町88  
TEL (075) 771-3442



## 山とスキーの店 京都あるむ

京都市中京区新町三條上ル  
075-255-0288



この用具の事ならユニシが一番です!

御来店ありがとうございます

山とスキー レジャー スポーツ ショップ  
そして

海の



中・二条通河原町西 TEL 231-1202